2023年7月2日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

神様のゆりかご

［創世記1章1～13節］

初めに、神は天地を創造された。

地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。

神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。

神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」そのようになった。地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第三の日である。

[1] 「聖書」は誰のために書かれたのか

「聖書」は、英語では「バイブル」と言う訳ですが、これは、ギリシア語の「ビブロス」に由来しているとのことです。そしてその「ビブロス」というのは、紙の材料となっていた「パピルス」ですね。「ビブロ」という書店がありますけれども「ビブロス」とは「書物」という意味です。そして、「聖書」は、「書物中の書物」という意味合いから「バイブル」という名になったようです。ただ、聖書は確かに“書かれたもの”ではありますけれども、私は、聖書は、いわゆる「文献」というものではなく、「手紙」と言った方が近いのではないかなと思います。それは、先週まで読んできた「ローマの信徒への手紙」などは正に手紙なのですけれども、今日からご一緒に読む「創世記」も、「手紙」と捉えて読んで良いのではないかと思います。何故かと言うと、「手紙」というのは、「相手」があるということです。「あなたにこのことを伝えたい」という「思い」があるのです。

「創世記」から私たちは何を読むのか…。“読む”という以上に何を“聴いてゆく”のか、という所を大事にしたいと思っています。私は今日のお話の題を「神様のゆりかご」としました。創世記第1章は、天地創造の物語の章です。神様が造られた世界のことです。文字通り「造られた」。何のため？誰のため？―神様が愛を注がれている人間のためです。あなたのため、私のため。この世界はまるで「ゆりかご」のようだと思います。生まれたての赤ちゃんを受け容れ、納め、育む器がゆりかごであるなら、この宇宙は、この地球は、ゆりかごではないでしょうか？そのゆりかごは、偶然出来たのではない、神様が途方もない愛と意思をもって造られたのだと、そのことを聖書は私たちに伝えてくれている、そのことを知ってほしいと、まるで祈りを持ってラブレターを書くように私たちに今届けられている。そのことを今日ご一緒に聞いて行きたいと思っています。

[2] 神様は「創造」する方

創世記1章1節。「初めに、神は天と地を創造された」。神様の交響曲の第一楽章の冒頭部分です。作曲家だったら、どんな音楽をつけるのでしょうね。

私たちは、想像しても想像が及ばないのですけれども、全くの「無」から神は天地を創造された（クリエイト）されたと言うのですね。神様がどのようなお方なのか、私たちは自分の小さな頭であれこれ思いを巡らすことは出来るのかもしれないのですけれども、それは、聖書の言葉を聴くまでは、これまでのイメージ上の神様にしか過ぎないでしょう。しかし聖書は、神様はまずクリエイター（創造者）なのだということを告げるのですね。「無」から「有」を創造される唯一の方。それは、言い換えれば、「死」から「命」を呼び起こすことが出来る方でもあると思います。では「神様」は何のために在るのでしょうか？神様は怖い方だと時々私たちは思うかもしれません。それは私たちが罪人だからそのように考えてしまうのだと思います。私という存在は裁かれて然るべき、そうでなければ神は神でないと考えてしまう。けれども創世記冒頭で示される神様は、「破壊」される神ではありません。「裁き・壊す」神ではありません。全く正反対です！神は、「創造する方」なのです！来週更にそのことに触れることになると思いますが、だからこそ神は人間を創造されたのです。破壊するために人間を造る、この世界を造るなどということはあり得ないと思います。私は（かつて私自身がそうでしたから思いますが）破壊的思想は、人間のニヒル（虚無）に基づいているように思えてなりません。「罪」とはある意味、私たちがニヒルに陥ることではないでしょうか。

神様は、天地を造られました。しかしその天と地は、今のこの地上から見えるような天と地ではなさそうです。2節をご覧ください。「地は混沌であって、闇が深淵の淵にあり、神の霊が水の面を動いていた」とあります。以前の訳では「地は形なくむなしく」となっていました。まだ「混沌」、カオスの状態なのです。そして闇が覆っている。ボンヘッファーというドイツの20世紀の牧師・神学者は「地は、今待機している。神を賛美する地となるために」というようなことを言っています。これは、私たちの現実と無関係ではないのです。神様は、混沌を知り、闇が覆う世界も神の手中にある世界として知っているのです。ですから「神の霊が水の面を動いていた」と、神様のまなざしがその闇の世界の中にも注がれていることを告げています。この地は、待機しているのです。そして3節です。「神は言われた。「光あれ。」こうして光があった。」ここであたかも音楽は、上からの一条の光が射すような明るい音色の楽器が響き、初めて、闇が破られます。「光」を受け、この世界の輪郭が見えてきます。今、光が与えられることによって、この世界は、神と共に生き始める命が生まれても良い世界になっていくのですね。しかも、その光と神の言葉とは一つです。神は意思をお持ちです。考えても見て下さい。私たちには光は作れません。スイッチを押せば明るくなる光は、光の模倣に過ぎず、電力が途絶えればそれまでです。「光」も創造物なのです。そして創世記はこの後、人間が創造されるまで、大空を造り、海を造り、陸を造り、私たちの住む星には植物を生えさせ、また、太陽と月、そして魚、鳥、またありとあらゆる動物を造られました。そして、来週見ますが26節では人間の創造が語られています。

これらを神様は、「言葉」で創造されたのです。私は「言葉」というのは、時に人を深く傷つけることもありますが、根本的には「愛」そのものだと思います。

学校でも職場でも、或いは家庭でも共同体でも、一番人の心を傷つけたければ、その人のことを無視することかもしれませんね。いわゆるシカト、言葉を交わさないということです。しかし、これはやはり良くないと思います。どちらも孤独に陥ってしまうと思います。しかし神様は、言葉をもって、その「呼びかけ」をもってこの世界を創造しました。これが「愛」でなくてなんでしょうか？

「呼びかけ」といえば、今朝のNHKの朝ドラの『らんまん』見ていますけれども、いいですね。植物博士の牧野万太郎（富太郎）は、いつも帽子をかぶり絵を描く道具も持って山林に入って行き、珍しい草木に出会うと、グッと近づき、声をかけるんですね。「おお、お前は新種か？はじめまして。わしは万太郎じゃ」と言うように、挨拶をする。…まるで、神様が、私たち一人ひとりに出会って下さるような感じではないですか？私は胸打たれますね。

[3] 神様が私たちのことを第一に考えて下さったので

 私は先ほど、この世界はおおきな「ゆりかご」ではないかと申しました。私たちは神の可愛い子どもなんです。神様がこの世界を造られたということは、私たちを生まれさせるためです。生まれてきて欲しいので“舞台”を整えて下さったのですね。光、水、植物、ありとあらゆる被造物、それらは皆神様が私たちを守り、育むための「ゆりかご」と言って良いのではないでしょうか？

マルチン・ルターが、子供用に書いたという『小教理問答』にこういう言葉があるのです。「“天地の造り主、全能の父である神を私は信じます”」という所で。

「（問）お父さん、これ、なあに？ 」

「（答）父さんはね、神様がこの父さんのことを造ってくださったことを信じているよ。すべてのもの（被造物）と一緒にだよ」…と続きます。そしてルターは続けてこのように書いています。―「神様は私に、身体と魂、目と耳、両手両足、理性とすべての感覚を与えて、今もなお保っておられることを私は信じます。さらに、神様は、着物と履き物、食べ物と飲み物、家屋や中庭、妻と子ども、耕地と家畜、すべての所有物、身体を養い生活するために必要なものすべてを毎日豊かに与えてくださり、あらゆる危険から私を保護し、すべての悪から防御し守ってくださることを信じます。そして、それらすべてのことは、私の功労や価値によるものではなく、純粋に、父としてのまた神様としての善意と憐れみによるものなのです。これらのすべてのことのゆえに、神様に感謝し、讃美を捧げ、お仕えし、従う義務が私にはあります。これは確かに本当のことです」と。

ルターは、宗教改革の時代、多くの人々が真の信仰からずれて行くような厳しい中で、このようにある意味とても単純なことを語ったのです。「神様はあなたのためにこれだけのものを備えていて下さっているではないか。まずこの神様に感謝し、讃美を捧げ、従いましょう」と、神様を優先順位の第一にすることを語るのです。そして、それは何よりも神様の憐みがあるからだと言っています。そうです、まず神様が、イエス様が、私たちのことを第一に考えて下さったのです。それが十字架の出来事でなくて何でしょうか！

主は、私たちのために、「神様のゆりかご」を造って下さいました。私たちはそのゆりかごを保持していく責任もあるのだと思います。この世界もそうですし、「教会」もまた、皆が憩えるゆりかごでありたいと思います。最後にとても下手ですが、私自身が最期の時に歌いたいと思う讃美歌を歌わせて頂きたいと思います。478番の「共にいませ、わが主よ」の4節です。―「闇に照る十字架を　閉ずる目に仰がしめ　生くる日も死の時も　共にいませ　わが主よ」。お祈り致します。

神様、今日こうしてご一緒に、造られた者として、あなたの前にあり、あなたに讃美を捧げることが出来ますことを感謝致します！あなたは、天地創造の初めにあり、そしてまた、終わりの時にも私たちの神でいて下さいます。そして、主イエスが私たちの人生の喜びも悲しみも共に歩み、罪を赦し、生きる幸いを与えて下さいますから感謝致します！どうぞ、このかけがえのない神様のゆりかごを私たちも大切にし、共に生きて行く世界を祈り続けていくことが出来ますように。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。